

---

# 呪われた日曜日

めいそ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

呪われた日曜日

### 【コード】

N6022Z

### 【作者名】

めいそ

### 【あらすじ】

とじてんせつのはなし

今日は一月二十三日、クリスマスイブの前日。

私とまきびと陽子と美紀は、まきびの家に行った。

まきびの焼いたクッキーの味見、というのがこの集りの名目だ。

まきびの部屋にみんなが揃うと、まきびは一度部屋を出てから、ティーカップ三つと、焼きたてのクッキーを入れた皿をお盆に載せてよろよろと危なげに運んできた。

「まきびの焼いたクッキーだからどんなもんかと思えば、案外おいしいね」「うんうん」「そうでしょー？」「味見つてことは、誰かにあげるものなの？」「そうだよ。でも秘密」「教えなよ」「そんな会話が続き、やがて話題が一段落した頃だった。

「あのね、この話聞いたらその人死ぬんだけど話していい？」まきびが出し抜けにそんな話題を切り出した。

「いや、だめですよ。あんた私たちを殺す気なの？」「陽子がまきびにそうつつこむ。

「ううん、そうじゃないの。これ誰かに話さないと私が死んじゃうから」「まきびは首を振る。つられてポニーテールがゆさゆさ揺れる。「あ、もう話に入っちゃったから全部話すね」

「おい」

「呪われた日曜日っていつてね、この話を聞いてから、その呪われた日曜日までにこの話を他のだれかにしないと、その人は神隠しにあって死ぬの」

「まきびそんなの本当に信じてるの？」「陽子は半ばあきれ顔でまきびに言う。こいつ大丈夫か、というような口ぶりだ。私はそれがおかしくてつい笑ってしまう。

「うん、早く誰かに話してきた方がいいよ」「まきびは小学五年生とは思えないあどけない口ぶりで答える。

「……ま、あんたらしくていいけどさ」「陽子は苦笑する。「んで

その呪われた日曜日って何日なの？ まさか十三日とか？

「ううん、毎月第四日曜日だって」

「えらい頻繁にあるんだね、しかもなんか資源ごみの回収日みたいだ」美紀が言う。眼鏡が傾き、それをさりげない動作で元の位置に戻す。

「なんてチープな都市伝説なんだ……」陽子が呟く。

「こういうのって都市伝説に入るのかな？」私は疑問を呈する。

「でもわたし都市伝説って言葉を聞くとちよつと怖くなるなあ」都市伝説という言葉の響きに美紀が反応する。

「いやいや大丈夫だって。んで今月の第四日曜日っていつ？」

「明後日だね」私は言う。

陽子がカレンダーを見る。今日は一月二十三日の金曜日。

「二十五日ってことは、クリスマスじゃん！」

「重なっちゃてるね。聖なる日なのに呪われてるんだ」美紀はくすりと笑う。

「みんなクリスマスって予定あるの？」声のトーンを上げて陽子が聞いた。

「あるよ」まきびが言う。

「私も」私もまきびの返事に追従する。

「わたしも。……家族と食事だけだね」美紀が自虐的に言う。

「じゃあなんもないのはあたしだけかあ」陽子が残念そうに言う。

「陽子ちゃん元気出して、その内いいことあるよ」まきびがのほほんと陽子を励ます。

「今さっき、あなたに呪いの日曜日教えられたばっかだけだね」

「あはは」美紀が笑う。

「しかしまきび、これ私たちに同時に話したら被害広がるんじゃない？」陽子がふとした疑問をまきびに投げかける。

「あ、ほんとだ」驚いて口を開けるまきび。

「流石まきびちゃん」美紀が笑う。

「こんな話どこで聞いたの？」

「弟から聞いたんだ。弟も怖がってたよ。呪われた日曜日まで誰にも言わないと黒髪の怖い女がやってくるんだよ！ そいつは子供が好きだからさらって殺しちゃうんだ！ お姉ちゃん死なないでね！ っつて」

「そんなら実の姉じゃなくて他の奴に話せよな」陽子がくつくと笑う。

「ブギーマンみたいだね」美紀が言う。

「何それ？」私と陽子が同時に聞く。

「英語圏でよくある伝説だよ。子供をさらいに来る「何か」で、その正体は幽霊とも鬼とも妖精とも言われているんだけど、地域どころか各家庭で言う事が別なもんだから、結局のところ正体はわからないの。「いい子にしてないと　がさらいにくるぞ」って子供の時言われたでしょ？ あんな感じで曖昧な存在なんだよ。世界中で類似の話はあるから、すべての子供が抱く姿のない恐怖そのものだって言われている。今回の話とちょっと似てるなあって思って」話しながら美紀は眼鏡の奥で瞳を輝かせている。

「美紀は怖がりな癖にそういう話好きだね」と陽子が指摘する。

「怖がりだから好きなんだよ」美紀は反論する。

「わたしも怖い話好き。豆まきの鬼とか怖いよね」まきびが言う。

「いや、それはレベル低すぎるでしょ」陽子がつっこむ。

「ママがパパに特殊メイクをしてすごくリアルな鬼の役をやらせるんだ。だから三年生くらいまで鬼の存在を疑わなかったの」まきびが答える。

「まきびのお母さん特殊メイクアーティストだっけ。まあなんとというか……ユニークでいいんじゃないかな」陽子が言う。

「うん！」

その後しばらく雑談が続く。

そして、

「はー、話しこんじゃったね」かすれ声で陽子が言った。

「うん、さっきの話、すごく面白かった」まきびはまだ笑ってい

る。

「もうこんな時間。暗くなるからそろそろ帰らなきゃ」

「私もお暇しようかな」私は立ち上がる。

「ところで、呪われた日曜日。どうするの？」まきびが聞く。

「わたしは一応こういうの信じなさそうな人に言うかも。なんとなくね」美紀は答える。

「じゃああたしは言わない。信じてないもん。大丈夫、二十六日はちゃんと電話をかけて二人に生存を伝えてやるよ」陽子は強気に胸を叩く。

私はほほ笑む。

「でも心配だよー」まきびが言う。

「おまえなあ」陽子が苦笑いする。

私たちは部屋を出て階段を下り玄関を出る。

外に出るとまだ五時だと言つのに随分暗い。街灯の明かりが道路を照らしていた。

「それじゃあね」

「気をつけてね」

「ばいばい」

美紀と陽子はお互い反対方向へ歩いていく。私は陽子の後を歩く。なぜなら、きつと陽子は二十五日に私と来てくれるだろうから。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6022z/>

---

呪われた日曜日

2011年12月20日02時01分発行